

イタリア北部の海上都市ベネチアの中心にあるサンマルコ広場の世界有数の絢爛たる光景や、人工の小島を二分するカナル・グランデの両側に林立する豪華な建物から、ここが世界文化遺産に指定された観光都市であることは容易に納得できるが、かつて西欧社会の商業と軍事の拠点であったことを想像するためには、歴史の知識を必要とする。

実際、一三世紀初頭に第四次十字軍がコンスタンチノープルを攻撃するために出発したのは、この軍事都市であったし、一三世紀後半に富裕な商家の息子マルコ・ポーロが東方に出発し、一七年後に帰国したのも、この商業都市であった。そして一六世紀後半にキリスト世界とイスラム世界が正面衝突したレパントの海戦で、二〇〇隻以上の艦船からなるキリスト教連合艦隊の主力戦艦はベネチアの所属であった。一〇平方キロメートルにもならない小島が当時の世界の中心になりえたのには、当然、いくつかの理由がある。第一は優秀な造船技術である。現在では木造船舶の普通の製法であるが、中心となる竜骨を船台に固定し、両側に肋骨となる木材を接続して骨格を構成し、そこへ船板を貼付けるという方法はベネチアで発明された。その工法で大量に木造の商船や戦艦を製造した国立造船施設(アルセナーレ)は当時の技術革新の中心であった。

第二は国家の絶好の位置である。東洋の金銀、香料、布地は往時の重要な交易品目であったが、アフリカ大陸を周回する航路が発見される一五世紀まで、それらはシルクロードを輸送され、そのまま陸路か、黒海や地中海上に移行するという経路で西欧に配分された。いずれもベネチアを中継地点としていた。もちろん、その地位を確保するためには巧妙な外交や強力な海軍を用意する努力があったが、立地の優位が多額の貢献をしていた。

ところが一六世紀以後、この地位が動揺するようになる。まずオランダや北欧諸国が優秀な造船技術を開発する。それを象徴する事件が一七世紀末期に発生した。ロシアのピョートル皇帝が技術の視察にベネチアではなくオランダを目指したのである。アルセナーレの技術が先端ではなくなった結果、ベネチア艦隊も最強ではなくなっていく。そして一五世紀最後に東回りと西回りの航路が発見され、ベネチアは拠点の地位を急速に喪失していく。

昨今の日本の状況に酷似している。七〇年代から八〇年代、日本は工業国家として世界二位になるほど繁栄したが、それに慢心し情報社会の基盤整備に出遅れた。現在の日本はコンピュータの普及で世界一番目、インターネットの普及で一〇番目でしかない。そして戦後の日本を繁栄させた二大共産主義国家に直面するという位置は、ソビエト連邦の崩壊と中国の資本主義経済への移行とともに、かつてほど評価されるものではなくなってきた。

ベネチアでは国家の衰退とともに若者が覇気を喪失し、適齢男子の結婚比率が急速に低下し、一六世紀に五割、一七世紀に四割、一八世紀に三割程度となり、子供のいる夫婦の比率は四割になった。そして一八世紀の最後に南下してきたナポレオンの軍隊に戦闘することなく降伏して国家として終焉する。現在の日本の二〇歳台男子の未婚比率は七割、女子も五割であり、就業しない覇気のない若者の急激な増加は大社会問題になっている。

人間の感覚器官は緩慢な変化を察知しにくい。それを補正するのが過去を記録し参照できる能力である。歴史は緩慢な時間を圧縮して本質を理解させる手段である。日本という一見安泰な国家も、歴史を参考にすれば、前回のカルタゴ、今回のベネチアと瓜二つの状況にある。ローマそしてナポレオンは突然登場するかもしれないのである。